

# 高松經專論叢

第十九卷（第一・二・三號）

（昭和二十七年三月二十日發行）

高松藩

文化—文政—  
天保年間の

財政難と其の解消

高松藩札史の研究

小川 福太郎

## 序 言

- 一、高松藩の銀札
  - 二、八代頼儀の時代の財政状態
  - 三、九代頼恕の時代の財政状態
  - 四、頼恕の時代の財政難対策
  - 五、平價切下後の財政状態好轉
- 總 括

## 序

## 言

高松藩は、松平家の頼重（英公）が初代藩主として明正十九年（紀元二三〇二年）二月就封してより明治四年（紀元二五三一年）七月の廢藩置縣に至る迄の二百三十年間に於て、財政の難局に遭遇したること少くとも三回に及ぶものと見られる。（註一）即ち第一回は初代頼重の末年より二代頼常（節公）の代に至る十數年間であり、第二回は三代頼豊（惠公）

高松藩文化—文政—天保年間の財政難と其の解消

の末年より四代頼恒（懷公）五代頼恭（穆公）六代頼眞（定公）の代に至る六十余年の長期に亘るものである。而して本稿に述べんとする第三回目が最後の難局であり、八代頼儀（襄公）在職の半ば頃より九代頼愨（愨公）の代に及ぶ約三十年間に亘り、年代は文化・文政より天保年間に及ぶものである。

本稿は右第三回目の財政難が如何なる原因と状態とを持つものであつたか、又それが如何なる手段・方法に依つて解消せしめられるに至つたかを述べるのであるが、之れを述べることは副題に示した如く高松藩札史の重要部分を研究することになり、其の中心の問題をなすものは藩發行の銀札の流通價值となり、此の價值の如何が藩財政状態の良否を最も良く反映してゐるものであると言ふことが出来るのである。

（註一）濱田晋氏が、高松藩財政が極度の窮乏状態に陥つたことは二百余年の間に於て二度であると考へられる（香川縣立高松商業學校調査部報告第一輯「郷土産業」所載、「高松藩財政史中に於ける二度の危機に就いて」一頁）に對し、河野一夫氏は「松平藩の財政窮乏は……三回あつたやうである」と見られてゐる。（『讃岐史談』第四卷第二號所載、「高松藩財政に關する神遺的研究」四頁）。此の相違は本稿に述べた比較的短期の第一回を算入するか否かに依る相違であるが、私は三回説を採るものである。

## 一、高松藩の銀札

前述の如く高松藩財政状態の良否を最も良く反映する指標と見られるものは、五代頼恭の時代寶曆七年（紀元二四一七年）十月以來藩が發行し來つた銀札の流通價值である。銀札は、一方には其の發行準備たる銀との引換が圓滑に行はれるや否やに依り、他方には物資の生産配給状態に應じて人々が交換媒介手段として好んで授受する程度に依つて、其の流通價值を異にする。即ち引換が圓滑に行はれ人々が好んで授受するに至ると、時として硬貨に對して打歩を付せられる程に尊重せられるが、反對の場合特に財政窮乏のため濫發せられて銀との引換が困難又は不能となるときは、價值は大いに低落して硬貨に對して其の開きが増大する。

元來、高松藩が銀札を發行するに至つた動機は、徳川時代の他の多くの藩に於ても見られる如くに、(註二)藩財政の困窮を救はんがためであつて、最初は好ましからぬこととは思ひ乍らも己むを得ずして之れを行ふに至つたのである。この事は「増補高松藩記」所載の下文に依つて知ることが出来る。

「右銀札通用被仰付候御主意は、打續御勝手向御逼迫に付、重く御儉約被仰付、無理なる御繰合せをも致候へ共、何分其効無之、追々御他借銀相増、當座の御凌方にも行當り、必至の御國難に立至候處、去る享保年間より、諸國とも段々領内限、銀札通用相始り、近國領々にも、年來銀札相行はれ居申候間、甚相好み不申義には候得共、右趣法相立候はゞ、必定一時の御急難を凌可申、尤仕方宜候は、永年御勝手向、御融通の都合にも相成候義と、兩三年以來、勘定奉行平尾彌一郎義、機々工夫致候<sup>(1)</sup>」(傍點は筆者に於て付す、以下同様)。

右の如き動機に基いて高松藩札は發行せられたが、當時は高松藩第二回目の財政難局時代であつて、翌年寶曆八年の藩記には「今年迄に江戸上方御國にての御借り金銀、合せて金五十萬兩餘に相成、年々利金銀御拂方計も數萬兩に及候義に御座候<sup>(2)</sup>」とある程であつた。然し藩札發行の當初に於ては他藩の例に鑑みて其の信用を失はぬ様に慎重を期し、引換準備を豊富にして引換を滞らしめなかつたので、藩札は領内のみならず近隣諸國に於ても便貨よりも輕便として用ひられ、七代頼起・八代頼儀の時代たる天明及び寛政年間には便貨に對して打歩を付せられる程によく流通した。其の狀態は、左記に依つて充分窺はれる。

「……銀札仕立方金銀出入は、一々御目付の着立合、見届を受、諸事嚴密に取扱、引換方聊指支無之候に付、通用始りより人心歸附致し、年々通用高相増、大に御勝手向御融通の助と相成、漸々近傍四五ヶ國にても、高松札は無滞通用致し、天明寛政の頃に至候ては、銀札一文目に錢百文通用御定の處、下た方にては御國他國ともに、錢百五六文に取遣致、正金銀も右に准し、他に例も無之義の由是は其頃迄、上方近國は多分正銀通用にて、目方重く嵩高故、行旅の商人等勝手惡く御座候處、高松銀札は晝夜とも聊無滞引換相成、其品輕便に御座候を以、正金銀錢と見なし、他國商人とも、取引に相好持歸候故の義に御座候由申傳候」<sup>(3)</sup>

銀札の流通状態が右の如くであつたので、八代頼儀の就封(寛政四年—紀元二四五二年)當時の高松藩財政状態は良好であつて、此の點は、「天明以來年々出銀札相増、夥敷通用高に相成、尤それ程の代り金銀、札會所へ相納り御貯置に相成候事にて、近國にても御富國と稱せられ候義に有之候……」と記されてゐることに依つて知ることが出来る。のみならず、當時藩の會計を掌理せる家老小笠原三助等が世上流通の銀札高の大なることを見ても今後の成行を憂ひ、種々の方法を以て銀札引上策を講じたので銀札の價值は愈々高まり、遂には通貨縮少が行過ぎとなつて銀札流通高の不足が感ぜられるに至つた程であつた。<sup>(5)</sup>

(註二) 徳川時代に於て大小の諸藩が藩札を發行するに至つた動機は、必しも唯一つとは言へないが、其の中最も根本的なものは、小宮山綏介氏が「近代の紙幣」なる論說中に於て言へるが如く、「各藩の經濟漸く窮したので農民に課し商賈に借りたけれども之も遂には梗塞して所要を得なくなつた爲に、望ましからぬ事と思ひ乍ら必要上已むを得ず、札を發行するに至つた」ものである(黒正巖「封建社會の統制と鬭争」六三頁に據る)。高松藩札發行の動機も正に之れであつた。

- |             |       |         |           |
|-------------|-------|---------|-----------|
| (1) 増補 高松藩記 | 二〇二頁。 | (4) 同 書 | 三一四—三一五頁。 |
| (2) 同 書     | 二〇四頁。 | (5) 同 書 | 三一五頁參照。   |
| (3) 同 書     | 二〇三頁。 |         |           |

## 二、八代頼儀の時代の財政状態

然るに右の如き良好なる財政状態が同じく八代頼儀の時代に於て逆轉するに至り、第三回目の藩財政難を招來する遠因を作ることとなつたのである。其の事情は次の如くである。

寛政十二年(紀元二四六〇年)九月に至つて小笠原三助等の通貨縮少論者が罷免せられ、翌十月玉井三郎右衛門が家老となつて會計を掌理するに及んで、其の翌年の享和元年十二月より前任者の消極政策とは反對に、積極的な銀札貸付政策並びに産業振興政策が行はれることになつた。之れは「享和の新法」と稱せられる程劇期的のものであつたが、其の概

要を述べると次の如くである<sup>(6)</sup>

銀札を札會所に貯へて置くことは無益であるとの考へよりして、一方には銀札貸付政策を採り、藩士の家計困難なる者に對して低利を以て銀札を貸付け其の元利を知行物成にて收納し、又農商の富有なる者等に對して田畑山林を抵當として相當の利息にて銀札を貸出すこととした。而して他方には産業振興のために、藩が米・綿・雜穀・鹽・砂糖等の國産品を買上げて江戸大阪其他へ積送販賣を行ひ、或は從來國內に於て生産せられざる諸織物・絲類・家具・工藝品・武具等の製造を始め、造船・鑄物・牧畜・植樹・栽培等に亘り新に業を始める者或は在來の品々にても廉價に製造又は販賣し得る見込ある者に對して資金を貸與することにしたものである。

右の中藩士への銀札貸出高のみでも三ヶ年間に三千貫目余(金五萬兩)に上り、盛んに貸出が行はれたのであるが、其の方法が余りに放漫であつたため世間に奢侈遊惰の風を馴致し、貸付金は回收不能となつて銀札の濫發となり、札會所の引換準備金の枯渴を來し、遂には藩主の貯金を以て銀札の引換に充てざるを得ない仕末となつた。斯くて享和の新法は其の成績豫期の如くにならずして創設後七年目の文化四年に至つて抛棄せられるに至つた。其上、折悪しくも文化三年十一月には幕府より上納金三十萬兩を仰付けられ、之れを果すことを得ないため、先代より貯へ置きたる七萬兩の献納を以て勘辦して貰ふことになつたことも、藩庫の窮迫に拍車を加へたものと見られるのである。

要するに右の如き事情が後日文化初年頃より始まる第三回目の藩財政難の遠因となつたものと考へられるのであつて、此點は、前文の藩士並に農商家への貸付に就いて「……御家中への御貸方並右町郷への御貸方に數千萬貫目繰出し、是皆空札故忽に正金銀引換方相増、後年札會所引換難澁の根元と相成候趣に御座候」と記され、又産業振興のための貸付に就ては「……右元手中銀と申も札會所之空札を御世帶方へ借受候而、御貸出しに相成候事故、彌通用銀札大數に相成、正金銀引換多く追々札會所之引換元金銀拂底、無餘義御世帶方の御貯金を以引換候様成行、後年御不勝手之端と相成申候由」<sup>(9)</sup>

と記されてゐることに依つて知られるのである。

右の外、頼儀の時代に藩庫の窮迫を加重した事柄としては、屋島山麓に一ヶ年を費して文化十二年八月廿三日に落成した屋島神宮の造營費凡拾四萬兩余<sup>(10)</sup>と文化十四年九月頼儀上洛の入費七萬九百兩余<sup>(11)</sup>とが擧げられる。そのみならず文化十三年八月の大風洪水、同十四年五月至七月の大旱及び同年十一月に於ける藩主の江戸本邸の火災の如き災厄があつた。<sup>(12)</sup>右の中、文化十四年九月の頼儀上洛は幕命を奉じて仁孝天皇御即位の奉賀のためであつたが、病後の故に滞京日數長引き失費多く、之れがために藩庫の窮迫が頓に甚しくなつて來たことが左記に依つて知られる。

「文化十四年丁丑九月京都への御使御動被<sub>レ</sub>成候、然るに近年御領中打續候水旱災にて、年々御收納方多分に相減じ候中種々莫大之御物入相重り、丑年御上京之節も其以前永々之御病後故……御在京御日數多に相成、何角之御失費多く御上京一卷之御入目凡前々之二倍程も相懸り、加之御歸府早々御上屋敷焼失、彼是御出方夥く御勝手向御不都合に相成……」<sup>(13)</sup>

そこで右の如き窮迫を逃れるために種々手を替へて彌縫策を採つたことが、前文に續く下文に依つて知られるが、其の効果は全く一時的であつて落財政難は愈々深刻となつて來たのである。

「兼而御備置に相成候御軍用御國用の御貯金も頓て沸底致、江戸上方御領中にての御借り金銀類は相増候に付、追々御儉約被<sub>レ</sub>仰付候得共相届不<sub>レ</sub>申彌指支甚く、月々御定法に而高松より江戸表へ相廻し候御入用江戸御家中諸渡し方等之金銀繰出し方にも行當り、御公務にも拘り候に至申候間、無餘義大阪表御出入之町人共へ御頼みに相成、毎月江戸廻金かなりに繰出し貰ひ、冬分御收納米積登し元利返濟致、且又享和年中以來御領中通用銀札相増、正金銀引換多く相成御勝手御貯金迄も多分右に出拂候義之處、猶も忽の御逼迫を相凌候爲御領中の諸産物を銀札を以御買入に致、他國へ積廻し賣廻せ正金銀持歸候義を專取扱せ候に付、彌通用銀札相増引換方必至と指支候間、是又大阪町人之内へ御頼引受日々際限相立少々、引換貰ひ、御領中新規之運上品々被<sub>レ</sub>仰付是を以返濟致候事に相成候得共、全聊宛の引換にて諸人難澁に付、自然下々方にて私之相庭相立金銀之賣買致候故、銀札之位を落し諸物價沸騰一同之困窮と相成申候。(註三)右之運びにて御取續難に相成一候に付、文政元年戌寅に至不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>得已御家中御物成貳ツ成に被<sub>レ</sub>仰付、猶又嚴く御儉約被<sub>レ</sub>仰付一候」。<sup>(14)</sup>

右の如く、或は軍用國用の貯金を拂出し、或は江戸上方を始め領内に於て借金をなし、更には儉約を奨励すると共に、收納米を始め他の物産を積出して其の代銀をば江戸定用金工面のための借金の元利或は銀札引換準備金に充當するなど色々彌縫策を講じたが、之等の方法を以てしても藩財政難は救はれずして、結果は空札たる銀札氾濫のため其の價值は下落し金銀の闇相場が立ち、一方物資の減少と相俟つて物價は暴騰し、正に悪性インフレの傾向が現はれて來たのである。而して遂には方策に窮して文政元年（紀元二四七八年）に至つて、家中の物成を貳ツ成にする、即ち家臣に對して祿百石に付現米四十石を給する規定のものを二十石渡しにて済ますといふ俸給の半減を斷行したのである。（註四）斯かる方策は固より悪性インフレの傾向を防ぎ得るものではなく、只財政難が一層深刻化することを僅か乍ら喰止める程度のものに過ぎない。而して此の方策に依つて藩士の生活が物價高と相俟つて甚しく窮乏するに至つたことが充分察知せられるのである。

- (6) 増補高松藩記 三一四頁—三一八頁参照。  
 (7) 同書 三二二頁。  
 (8) 同書 三一六頁。  
 (9) 同書 三一八頁。  
 (10) 同書 三三五頁及び「(餘底秘記)より三三六頁。引用」。

- (11) 濱田普、前掲論文 六頁、「(襄公外記)より引用」。  
 (12) 増補高松藩記 三二七頁及び三三八頁。  
 (13) 同書 三二九頁。  
 (14) 同書 三二九頁—三三〇頁。

(註三) 此の當時の物價騰貴及び銀札下落は、必しも高松藩のみの現象では無くして全國的或は西國地方に亘る共通のものであることは、左記「三貨圖彙」に記載する所に依つて知られるが、之等共通の事情の上に高松藩特有の原因が加つて、藩財政の窮乏は甚しくなつたものと考へられる。

「前文之通去る文化十年の頃より……此文政二卯年まで凡七八年之間、諸物皆價高直に相成り、京大阪始め海内都て江戸の響にて、諸物高直に相成り、武家方始め市民迷惑せり……」(「草間直方著、「三貨圖彙」遺考卷一、一一八〇頁)。  
 又文政三年の草間直方の記録には次の如きものがある。

高松藩文化—文政—天保年間の財政難と其の解消

「……元來銀之儀も近年沸底に相見え、融通も滯滞之氣味有之、此儀は近來藝州邊、四國、九州邊銀札不融通にて、市民正銀を望み、其國之枵場々々へ銀札を正銀と引替る事多く、依之銀札場正銀沸底し、引替滞る時は、其一國のみならず隣國迄も騒動に及び、此以後銀札之融通不便宜を以て、其國々手當として、正銀を大阪表館入之市民へ頼談に及び、窃に取入用意をなす、此下し銀も廣大なる事にて自然と大阪も正銀沸底と見え、其上近年打續米價下落により、諸侯取入銀薄く、依之市民よりの借財銀も返済滞り、又は利下げ等難澁も有りて、市中總體不融通の開え有り……」。(草間直友、「三貨圖纂」遺考卷二、一一九〇—一一九一頁。)

(註四) 江戸時代諸藩に於ては「窮乏の極、家臣に對して本高の封祿を給せず、御借上と稱して其實知行扶持を削減したるものも少くなかつた」、「この御借上はまた借知とも半知とも稱した。必しも封祿の二分の一を減ずるものではなく、四分の一、三分の一等種々であつた」。(本庄榮治郎「日本經濟史話」八七頁及び八八頁。)

### 三、九代頼恕の時代の財政狀態

前述の如き財政難に直面し乍ら之れを打開するに足る對策を見出し得ずして、徒らに年月を經過して九代藩主頼恕の時代となつた。

之より先、頼儀は文化三年中より病身となり引籠り勝ちであつたが、文化十一年に至つて病氣は次第に重くなり江戸への往還も出来ぬ状態となつたので、翌十二年に水戸藩主徳川治紀の第二子で彼の著名なる齊昭(烈公)の兄に當る昶之助を養嗣子となじ、昶之助は其名を頼恕と更めた。(15)其後頼儀は文政四年五月に至つて遂に隠居して家督を頼恕に譲ることとなり、頼恕(愷公)は第九代藩主として就封したのである。頼恕は藩主として未だ入國せぬに先ち翌文政五年四月に、第十一代將軍家齊が從一位に叙せられ左大臣に任ぜられたに就いての御禮言上のために、幕命を奉じて江戸より京都御所への使者を命ぜられ、同年八月に至つて漸く藩主として入國することとなつた。(16)

頼恕入國當時の藩庫は先代頼儀の時代の窮乏の後を受けて愈々苦しくなつてゐたことが左記に依つて知られる。

「文政五年壬午秋初而御入部被成候得共、兼而御先代以來御勝手向必至と御指支之中、昨年御隱居御家督今年京都御使御勤彼是之御物入にて、猶又御配方御指支御家中御物成兼而御借上貳ツ成に被仰付有之候中、少分に而も御戻し被下度思召被仰出候得共中々相調不申、御家中以下に御入部御祝儀之御料理被下候義さへも御延引、僅かに御入部御祝儀として御家中へ高百石に付米貳石宛末々迄も其割



合を以て被下候、右之如く今年、至別て、御手詰りに付、大久保飛驒知行高之内千石當分指上、御家老共の内高祿之輩は何れも知行高之相應指上げ御急場之御凌方御手傳仕候、此義は古來例も無之至而不本意之御義に付、程なく追々御返し被下候得とも、飛驒指上高は多分、之義故御行届兼、是より十三年目天保五年甲午に至漸く御返し被下候」(17)

右の如く先に頼儀の時代に行ひたる減俸を幾分にも復活せんと希望も實現出來ず、却つて高祿者の減俸を加重せねばならぬといふ落として未曾有の事を行ふ程に急迫してゐたのである。更に翌文政六年は明和元年以來五十一年振の大旱魃で、收納米は四万七千石余の大減少となり、之れがために「御家中渡方貳ツ成之中、猶又渡し、殘に相成、江戸御家中は月々之御扶持米代も時々渡り兼候仕合にて、もとより必至と御不勝手之中故上下困窮甚き義に御座候」(18)といふ有様となつた。

更に又、豫て先代頼儀の時代に其子貞五郎(註、後に十代藩主となる頼胤)と婚約せる將軍家齊の女文姫を迎へる時期が次第に切迫するに就いて、何分相手は藩として前例無き將軍家のこととて、其の仕度金の見積り拾万兩余の調達に苦心し、遂に先代頼儀より幕府へ献納したる七万兩の中、六万兩の返還方を度々願出でたる結果、半額の三万兩を文政七年より毎年壹万兩宛返還して貰ふといふ状態であつた。(19)

右將軍家との婚儀は文政九年丙戌十一月廿七日に行はれたが、其後に於て文姫夫人並に其の近親筋への手當たる賄料が歴代の藩主夫人の夫れとは懸放れて多額であることが、更に藩庫の窮乏に拍車を掛け、其の負債を増嵩せしめる有力なる原因となつた。其の事情は次に摘録する所に依つて知ることが出来るであらう。

「……是迄御代々夫人君之御賄料は高低高三千石四ツ物成にて千貳百石、此頃迄之米價壹石金壹兩平均にして千貳百兩程之義に御座候處、文姫君様には年々公儀より金三千兩米五百俵被遣候得共、其餘御家にて御引受候御入用並御縁邊に付、世子には勿論公御初御家内之御方々より平常公儀大奥向を始、文姫君様御兄弟御姉妹之御方々等へ御動方之御入用、壹ヶ年金壹萬貳千兩之御定法にて毎年御不足に相成、壹萬五六千兩より七八千兩に至り申候、右を平均して凡米壹萬五千石計に相當り可申、然るに此時御家内之御方々御賄料老公高七千石……合て貳萬貳千五百石之上に、右文姫君様に付而之御入用壹萬五千石之高三萬七千五百石にて總計一ヶ年高六萬石之御出

方に相成、此外に未だ御賄料相定まり不申候御養方御弟妹御四方御座候間、此後、彌御借り金銀相増御取續難相成、士民御撫育も御行届不相成候様成行候も實に無餘義御次第に御座候」。 (20)

- (15) 増浦高松藩記 三二五頁参照。  
 (16) 同書 三三九頁—三四二頁参照。  
 (17) 同書 三四二頁。

- (18) 同書 三四三頁。  
 (19) 同書 三四四頁参照。  
 (20) 同書 三四六—三四七頁。

#### 四、頼恕の時代の財政難對策

右の如く年々入費の増大に依つて藩庫の窮乏は愈々甚しくなつて行くのであるが、之れに對して如何なる對策が講ぜられたかを見るに、第一には頼恕が身を持すること儉素に自ら卒先垂範すると共に、非常儉約を申渡して時艱を救はんとしたことを擧げ得る。即ち頼恕は就封の翌年文政六年に封内を巡視して民情を視察してゐるが、其際先代以來の士民の困苦を察して、其の行装は平常の放鷹の時の如くに擬し、<sup>(21)</sup>士民に迷惑を掛けぬ様に心を配つて居り、又士民の撫育に就いて行届き兼ねてゐることを常に遺憾として之れを救はんとする志が厚かつたのである。<sup>(22)</sup>之等の點に就いては、文政六年三月朔日より家老となり頼恕の時代を通じて藩政上功績の多かつた木村亘通明(後に木村默老と改名)が「慈公遺事」に於て次の如く述べてゐるところに依つて裏書せられる。

「公御家督の初より御先代様御逼迫の御跡を嗣せられ、京大阪江戸はいふまでもなく奈良堺大津等の金主をはじめ、公儀御代官金、官家の御名目金等までも御借用、御家の御重器をも御質入被遊し位故、御借財は山のごとく、且御住居様入らせらし事なれば年々の御費用夥しく御家中御借米も有之、誠に御難治御不自由の事なりしに、其中を堪へ忍び給ひ毎に質素節儉にして、御手元の事より始め萬事御省略を用ひ給ふがうへにも、下を御撫育の御心はふかく假にも御手荒なる事をなし給はず……」。 (23)

而して文政十年二月十日に至つて頼恕は非常儉約の申渡しをするに至つたが、之れに就いては次の如く記されてゐる。

「……近來不二ト通一御不勝手之中莫大之御物入指邊、御世帶之御配り更に相立不申候……一體當今の御逼迫は、古來無之程の義故、此儘にては無レ程御取續難ニ相成ニ至可レ申候間、猶又非常之御儉約取行ひ諸事古格前例に不レ泥御規定を押崩し、行々御勝手御取直に相成候義を詮に相心得可レ申旨御役人共に被ニ仰付、右儉約中は絹布之類其外華美之品々上方他國より取寄候義御指留、御國產物にて用辨可レ致旨被ニ仰付、……當分持來之品は何によらず着用御見免し被レ下候旨被ニ仰付一候」<sup>(24)</sup>

此の非常儉約の申渡しは其の效果に於て相當見るべきものがあつたことは、前掲文に引續き

「衣服之義如此被ニ仰付ニ候得共、下々まで御時節柄を相擇り、且は公御在國中は御綿服御着用被レ成候に付、誰以美服を着し候者は無之候」<sup>(25)</sup>

とあることに依つて窺はれる。又頼恕が士民の撫育に心を用ひた事に對して、文政十年町八百百姓が其の恩を感じて報恩の志を表はしたことに就いて、左の如く記されてゐる。

「……今年春夏之間町郷之者共格別御逼迫の御時節を相察し、聊御報恩之志を表し候由にて米穀金銀薪炭其餘身分に應じ候種々の品指上申度相願候旨、町奉行郡奉行申立御開届に相成、其品々御覽之上奇特之志を厚く御賞し被レ下、米穀以下之品々は御遺ひ用に相成夫々代銀を積り立、右指上候金銀と一結に致町奉行郡奉行へ御預、薄利にて災民共へ貸付元利積置候て、凶年饑饉之御救方之一助に仕候様被ニ仰付、兩役所に而後に右御趣意之通取計び申候」<sup>(26)</sup>

斯くの如きは仁政といふべきで、木村默老も言へる如く「御仁德のおのづと下へ通ぜし」<sup>(27)</sup>、ものと言ふことが出来る。

然し乍ら久しきに亘る藩庫の窮乏は右の如き非常儉約並に仁政のみに依つて救ひ得るものではなかつたのである。而も此の苦しい間に於て藩は久米榮左衛門の建白を容れて、文政九年三月十一日に彼れを御普請奉行として阪出新田開發を行はしめるに至つたことを、此處に擧げなければならぬ。此の新田開發は當面の財政窮迫の對策としてよりも寧ろ將來の國益増進を期待したものであるが、前述の如く非常儉約の申渡しをする程に窮迫を加へてゐる際であるから、開發の財源拮据に就いては種々面し、又斯かる時節に之れを行ふことの可否に付き議論が多かつたにも拘らず、藩主頼恕の決意決

斷に依つて開發が命ぜられ、藩主自ら所謂陣頭指揮をなして遂に成功に到らしめたことを、左記に依つて知ることが出来る。

「文政十二年己丑八月阿野郡北阪出村新開地成功仕候、此新開は去る文政九年丙戌より開墾取懸り候義に而、其始より公深く御心を盡され、時々御乗馬又は御船にて御出御覽御自身御指圖も被成候……九餘程手廣之場所故御入費大分之積りに候處、御勝手向極御逼迫中故聊も御出銀難ニ相成、無餘義年來御手元御儉約被成少々、御貯置に相成候御内證金を御繰出し、不足之所は札會所之在銀札を借受、彼是取合せ差計ひ候様被仰付候、然るに个程極ニ御難澁ニ御時節柄、忽之御利益も相見不申事に大金を御費しに相成候義如何と申候者、段々有之折々は御勝手方御役人共の中にも兎哉角申立候義も有之候得共、最初に強く御決斷被成候義にて少しも御動き不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成、遂に成功に至申候」。(28)

「其頃公御近習共へ仰に、坂出新墾之事世上にては我等之物數奇にて、無益之金銀を費し候様に申候者も有之候由度々承り候なり、然れども我等平生衣食住を始、器物飪好何一ツ物數奇無<sub>レ</sub>之は何れも存知之所なり、もし左様之筋に物數奇等有<sub>レ</sub>之候は、其費は少分たりとも終に取返す期有べからず、坂出之事今は金銀を海中に投するに似たれど、後年國益に可<sub>レ</sub>成は必定なれば、かくの如く自ら心力を盡し指揮をもすることにて大なる樂なり、されど此事ばかりは誰が異見申候てもたやすくは止間敷と思ふなりと、被<sub>レ</sub>仰候て御笑ひ被成候由」。(29)

右坂出新田開發事業の費用及び完成後の收益に就いては

「御入費存外少く最初より總計金貳萬兩餘にて成功致候、鹽田釜家數七十軒、一ヶ年産鹽三拾萬俵餘、是に付候諸上納金千八百兩餘、畑九拾七町八反餘、此貢米三百九拾七石餘、一ヶ年總御收納高平均三千兩餘、此中千兩計年中諸入費、其餘貳千兩餘之御益金に御座候……」。(30)

と記されて居り、此の事業の着手より完成迄の三年余の間に於ける貳萬兩余の支出が當時の藩財政に取つて相當の重荷であつたこと、又完成後の收益が藩財政の窮迫を幾分にも緩和することに至ることが想像せられるのであるが、何分積年の財政窮迫による負債の累積が莫大であつて、文政十一年(紀元二四八八年)に至つて「……全く當座御凌之爲江戸京大阪堺大津之商家或は江戸京奈良にて種々の名目金等、追々に御借入に相成候金高五拾萬兩餘に相成」(31)と言ふ有様で年々の

元利の返済も容易で無かつた。於之何等かの方法を講じなければならぬこととなり、第二の方策として採られたのは先代頼儀の時代にも行はれたる收納米の賣拂であつた。然し

「近年は御收納米之中にて指定り候御入用御家中渡米を除候外、不<sub>レ</sub>殘御賣拂御借金方へ指向け候得共、中々はかゝ敷御拂方には至り不<sub>レ</sub>申、何方も不都合のみに御座候」。(32)

とある如く、之れのみでは負債の輕減も覺束無いので、第三の方策として、之れ亦先代頼儀の時に採つたものであるが、銀札の製造に依つて國產品等を買上げ之れを諸國へ積送販賣し、之れによつて江戸定用金の調達に充當することになった。即ち次の如くである。

「……不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>已<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>札會所<sub>一</sub>銀札を製造致御勝手方へ借受、是を以御國諸御入用御家中渡り物等を相計ひ、又米穀砂糖綿を初諸御國產物を銀札を以御買上に致、上方他國へ積廻し賣捌、其代金銀を江戸へ相廻し彼地之御遺用に致來候」。(33)

然し右の如き方法にては、假令對外負債たる諸國に於ける借金を幾分輕減し得るにしても、一方對内負債たる銀札が濫發となるから悪性インフレを助長し、之れを適當に喰止める方策を採らなければ、物價が益々騰貴し來ることに依つて、國產品の買上積出しも遂には行ひ得なくなる虞れがある。それにも拘らず右の如き方法を採つたことは、適切なる對策を見出し得ずして採られた窺余の策であるといふことが出来る。而して其の結果は、

「それ故是迄札會所にて借用之銀札高數十萬兩に相當るに至申候、是皆世上に出拂通用致候間、隨而正金銀入用に付引換願出候者多く御座候得共、引換金銀無<sub>レ</sub>之、時々札會所之門を閉候而引換不<sub>レ</sub>致義も御座候間、自然町方に金銀賣買致候者數多出來、金壹兩銀札に而何程と申私之價を立、世上在金銀之多少により時々高下有<sub>レ</sub>之、始壹兩七八拾目より壹貳百目、後には六七百目より壹貫目に至候義も御座候」。(34)

といふ状態に陥つたのである。換言すれば、銀札の濫發が余りに甚しく、引換に應じ得なくなつたため、金銀の供給減需要増を來し其の投機的賣買が盛んとなる一方、銀札の價值は法定比價たる金壹兩銀札六十目より滔々と下落して遂には六

七百目より壹貫目にもなる、即ち法定比價の十分の一乃至十七分の一にまでも下落することになったのである。於之、  
 「今様之勢に相成候而はたとひ札會所に少々之金銀有之候而も、法之通壹兩六拾目之引換は相成不申候故、無餘義金壹兩銀札六、  
 七百目に相極申候」(35)

といふことになつたが(文政十一年)、之れは銀札の市中相場が法定比價の十分の一乃至十二分の一程の價值しか持たないことを公認し、今後斯かる割合でなければ引換に應じ得る見込の無いことを示したものであるが、未だ今日言ふ「平價切下」でなくして、平價切下の豫告と見るべきものである。平價切下ならば、(一)從來の金壹兩と從來の銀札例へば六百目とを引換へることに定めるか、(或は此際舊札を回收しそれに對して例へば其の十分の一の稱呼の新札を交附するか)或は(二)從來の金壹兩の金量为例へば十分の一に改減したる新貨と從來の銀札六十目とを引換へることに定めなければならぬ。此の二つの方法の中、(二)は硬貨鑄造の權利を有してゐない藩としては出来ないのであるから、平價切下として(一)を選ばなければならない。然るに先の銀札市中相場の公認は未だ之れまでに到らないものであるから、平價切下の豫告と見るべきものと思ふ。而して此の豫告の結果は、

「ここに於て世上に銀札を貯持又は貸附有之者は忽十分之一と成、又借銀致居候者も十分之一と成、憂喜も不都合甚敷」(36)  
 とある如く、銀札を貯へ持てる者や債權者は大損害を蒙ることとなり、他方に債務者にとつては負債の大輕減となるから悲喜交々で、債權債務關係の善しい變化と又恐らく生じたに相違ないところの諸品の銀札價格の暴騰とに依つて、世間が甚しく混亂したことが想見せられるのである。

ところで、只だ銀札の市中相場の公認するに止り、未だ新平價を以ての正金銀との引換の約束をせずに放置するならば、爾後亦銀札が増發されるに至る時其の價值が更に暴落することは必定である。藩の當局者も此點に就いては氣付いてゐたものと見え、

「此體に而は無し、銀札五解に、至可レ申、左候時は正金銀之御融通相整不レ申は勿論、忽之御審し方にも行當り可レ申候に付、尙卒通  
用銀札を漸々に引上げ、世上に銀札少き様に相成不レ申候而は不レ叶義と様々評議を盡し候得共、其術無之……」(37)  
と記されてある。そこで今後の問題は、世上の銀札を回收することにあるが、前文の如く「様々評議を盡し候得共、其  
術無之」といふ點より判斷して、公認したる銀札相場割合を以てしても引換を行ふに足るだけの正金銀が無いために、  
平價切下を行ふだけの準備が出来て居らず、従つてそれを實現するに到らなかつたことが明かである。而して之れを實現  
するに到つたのは、後述する如く之より五年後の天保四年三月であつた。  
要するに銀札の市中相場の暴落を公認して平價切下の豫告と見るべきものを行つたが、平價切下そのものは未だ實現出  
來ない状態であつた。と言つて此儘放置することも出来ないのと同じく文政十一年に次に引用するが如き方策を採ること  
になつた。

(前掲引用文に續く)

「不レ得レ已誠に御不體裁至極の事ながら、全く一時之御標道を以、御領中農商富有の者共持高田地之定貢を、永年買受無稅作り取に仕  
度、志願之者は、永年之貢米銀札を以、一時上納之振合にて御賣渡可レ被レ下旨、内々御役人共より申諭候處、追々願出候者有レ之、今年秋  
冬間に定貢四千三百石餘之所、御賣渡被レ下候、右貢銀札百目に付米壹升五合之割合にて貳萬九千四百貫目餘、壹兩六拾目換之金にし  
て四拾九萬兩餘に相當候得共、此頃壹兩七、百目、程之銀札故、眞之金高四萬貳千兩餘に相當り申候……」(38)

即ち藩内の富有の農商業者に對して今後其の持高田地より毎年收むべき定貢を、藩が收納すること無くして彼等に賣渡  
し彼等は藩より買受けるといふ體にして、其貢米に當るものを銀札にて一時に納めさせるといふ方法で希望者を募つたの  
である。其の結果、文政十一年の秋冬の間に收むべき定貢四千三百石余を藩が賣渡することになつたが、其の價格は銀札百  
目に付米壹升五合の割合であるから、藩は銀札で貳萬九千四百貫目餘を收納したのである。従つてそれだけ世上流通の銀  
札を回收し得たのであるが、此の銀札が以前の如く金壹兩に對し六十目の法定比價通りの價值を持つてゐるものならば、

金に換算して四十九万兩餘に相當する譯であるが、當時金壹兩に對し銀札七百目程の相場であるから金に換算すれば四萬貳千兩餘に過ぎないのであつた。

然し兎に角、銀札貳萬九千四百貫目餘を回收したことに依つて「一應は銀札之位稍立直り候得共、何分此後も正金銀引換之御手當行届不申候故、兎角本之位には復し兼申候」<sup>(39)</sup>といふ状態であつた。

尙、文政十一年以後右の貢米賣渡し以外にも、世上の銀札を出来るだけ回收するために、山林用地の賣拂代金や新規之諸運上、其他藩の收納品を皆銀札にて取納め、札會所の銀札を世上へ出さぬ様に取計つた。<sup>(40)</sup>而して其の金額に就いては次の如く記されてゐる。

「文政十一年戊子より、天保元年庚寅に至、三ヶ年之間に、御領中之山林八拾ヶ所餘、並御用地御作徳米貳百四拾三石餘之所、町郷寺院農商等望之者へ御賣拂に相成候、此價金百九拾壹兩餘と、銀札壹萬六千八百貳拾貳貫五百目餘、御取納に相成候、此頃之金相場色々高下有之候故、右銀札金何程に相當候哉、昨と計算致兼候得共、平均壹兩六百目と致候て、僅に金壹萬七千八百兩餘に相當候……」<sup>(41)</sup>

右の如く世上の銀札を回收することに努め、又一面には文政十二年八月以後に於て既述の坂出新田開發による收益が擧げられてゐるのであるが、積年の財政困難は容易に打開せられ難くして、天保元年九月十八日には、先代頼儀の末年に行ひたる藩士の減俸を已むを得ず更に加重することになり、祿百石に付三石を減じて百石に對して僅かに現米十七石を給するに過ぎないことになつた。<sup>(42)</sup>更に天保三年に至つては

「御勝手方御配り方別而御指詰り、早春より御用意米迄御遣ひ拂に相成、六七月至候而は御在米聊に相成候間、八月に至早稻のみ、次第、急に相納を不申候而は、忽御家中渡米にも指支候程之義に御座候……」<sup>(43)</sup>

といふ状態であつて、而も其年は六七七月が旱魃であつた爲、諸社寺へ祈雨を仰付けたが其效無く、遂には石清尾八幡宮神前に於て祈雨の修法を行ふことを仰付け頼恕自ら徒跣にて參拜祈願することになつて、三日後に漸く十分の降雨を得、



同年秋は藩内満作であつたと記されてゐる。(44)

以上の如く藩財政難打開の目標に對しては二進一退とでもいふべき状態を續けてゐる有様であつて、此處に何等かの新方策を講ずる必要が感ぜられ、同じ天保三年冬に至つて次に引用するが如く江戸上方其他よりの借金元利の三年間支拂停止を斷行することとなつた。

「天保三年壬辰冬御勝手向必至と御指支に付、江戸上方其餘とも、御借り金銀元利御返納方來々甲午年迄、三ヶ年間總じて御斷りに相成申候、右は御先代以來之御借り金高五拾萬兩餘に有之候間、年々元利相應之御拂方相成可申様も無之、誠に聊宛配當致見送り居候得共、それとても莫大之金高に相成、御勝手御配り方立不申、此體にてはいづ、迄も御勝手御取直し之期無之候間、甚御本意ならざる義に候得ども一應年限を以暫之間、元利御拂方御斷りに致、其間に何と敷趣法相立、年滿の上は相應御返納方規定相立可然と……」(45)

右の支拂停止に就いては、以前より評議を重ねて來たのであるが、借金元利の支拂を全部斷る時は其の停止期間中に凶作・公務其他臨時の入用のために融通の付かぬ場合の起ることを虞れて、斷行を見合せてゐたものである。然るに次第に行詰りを生じ遂に「最早右之取行致候外無之候に付、前以種々御手當致、今冬に至右之通一切御斷に相成候」となつたもので、貸主よりの種々の苦情やそれに對する不義理をも構はず、「是非之論なく皆々御斷に相成申候」といふことになつたのである。(46)

而して右の如く借金の支拂停止をなすことに依つて、「文政之初より、毎年秋御收納米之中四五萬石づつ、御借銀御返辨方御手當として大阪へ積登し」(47)てゐたものを天保三年よりは中止して、之れを領内に於て賣捌き其の代金を銀札にて取納めて、世上の銀札回収を圖ることになつた。(48)ところで、借金の元利拂中止に依つて今後不時の入用の起る場合に困惑する様なことがあつてはとて、同年秋冬に役人共をして藩内へ懇々申諭して、定貢の外に米壹萬石及金壹萬兩を上納させ、更に天保四年及同五年の兩年にも金四萬兩を上納せしめた。(49)即ち三年間定貢以外の特別課徴をしたのであるが、之

れに就いて「高松藩記」に記すところに依れば、前記の借金返済手當としての大阪への積登し米の賣捌を急ぐために、文政の初より

「例年右御登し米三分は御米藏御門内にて取納之作法相濟候得ば、直に船積致遣候に付、一應之御藏入りにも相成不申義を、百姓ども内々相欺居申候由之處、本文之如く、御借り金御拂方御断に相成、今年より大阪御登し米相止み、御收納米不殘御藏入に成候間、百姓ども相侵、本文三ヶ年間課役之義も快く御受致候由」。(50)

とあるが果して百姓共が衷心より喜んで此の特別課徴に應じたものであらうか疑問とする。

偕て以上記述の如く、文政十一年の銀札市中相場公認以後、貢米の賣渡代、山林用地の賣拂代を始め新規の諸運上などを凡て銀札にて取納めることにしたのみならず、江戸上方等への借金の元利支拂停止に伴ふ收納米賣捌による銀札の回收、加ふるに三ヶ年の特別課徴などの種々の方法を探つた結果、漸く「追々世上の銀札相減じ、其位も立直り可申勢に付……」(51)と言ひ得る状態を迎へることとなつた。そこで天保四年(紀元二四九三年)に至つて愈々「平價切下」を斷行する準備として、「今年正月中、一應通用銀札不殘指出せ、朱之増印致相渡、銀札壹文目に付錢拾文に通用被仰候」(52)といふことに成つた。此の處置は世上流通の銀札を一應提出せしめて之れに對して、今後は從來の十分の一の通用價值しか認めないことにしたものであり、之れに依つて銀札の流通高が幾何であるかを知ることが出来たわけである。そこで此の流通高に對して相當の引換準備金の用意が出来るならば、平價切下を實行しても差支へないことになる。斯くて同年三月に至つて、「御領中通用寶曆製の銀札、悉皆引上、銀札は寶曆中初而御製造故其以來年々増製之分も皆寶曆製と相成候。天保製之新銀札に引換被仰付、古札百目持參之者へ、新札拾文目之割合を以相渡、前方之通金一兩銀札六拾目、錢百文、銀札壹文目通用に被仰付候」(53)といふことになつた。而して斯く定めるに就いては、豫め前述の如き處置を採ることに依つて、「銀札之員數も治定致、隨分引換御手當も相整可申哉に付、右之通新札に引換被仰付候」(54)と記されてゐることに依つ

て、引換準備金たる正金銀の用意が出来た後舊札を従来の十分の一の通用價值の新札と引換へるに至つたことが明かである。是れを以て文政十一年の銀札市中相場の公認以後五年目に至つて漸く十分の一の平價切下が實現するに至つたのである。

(40)	(36)	(35)	(31)	(30)	(28)	(27)	(25)	(24)	(23)	(22)	(21)
同	(37) (38) (39)	同	(32) (33) (34)	同	(29)	木村黙老、「慈公遺事」	同	増補高松藩記	木村黙老「慈公遺事」 (鎌田共濟會博物館蔵) (寫本)	同	増補高松藩記
書	同	書	同	書	増補高松藩記	書	書	書	書	書	書
	三五四頁参照。	三五〇頁。	三四九頁。	三五二—三五三頁。	三五二頁。	三四八頁。	三四七—三四八頁。	三四八頁。	三四八頁。	三四二頁。	三四二頁。

(54)	(53)	(51)	(50)	(49)	(48)	(47)	(45)	(44)	(43)	(42)	(41)
同	同	(52) 同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
書	書	書	書	書	書	書	書	書	書	書	書
三七四頁。	三七三—三七四頁。	三七四頁。	三七三頁。	三七二頁及び三七三頁参照。	三七四頁参照。	三七三頁。	三七二頁。	三六八—三六九頁参照。	三六八頁。	三六二頁参照。	三六二—三六三頁。

## 五、平價切下後の財政狀態好轉

前述の如く平價切下に依つて舊銀札の整理が出来た後に於ては、銀札と正金銀との引換を澁滞せしめることなくして其高松藩文化・文政・天保年間の財政難と其の解消

の價值を維持し得たかに就いては、

「……此後兩三年之程は、時々正金銀引換に指支、及苦辛候義も有之候得共、再銀札之位を落し候には至不申、其内砂糖爲替御貸方之法相立候而より、銀札夥く出増に相成候得共、正銀引換少しも相滞不申候に付、銀札之勢復古致、益盛大に相行れ申候」。(55)

と記されてゐる。之れは、平價切下後の銀札價值の狀態を約言してゐるものであつて、切下後二三年間は銀札の價值を落すことなく之れを維持して行く中に、「砂糖爲替」として資金貸付事業が行はれることになり、之れがために銀札の天増發となつたにも拘らず引換の澁滞を見ずして、銀札の價值は回復して大いに流通したといふのである。

兎に角、高松藩の財政は平價切下の實現を轉期として良化する形勢となつて來たのであつて、砂糖爲替の實施以前に於ても其の好轉の例證を擧げることが出来る。即ち天保五年八月六日に大風洪水ありたる時、家臣に對し手元金より手當を給與し、又百姓達へ無利子の年賦償還貸附をするに至つたことは其の一つである。而も斯かることが行はれたのは頼恕一代の間に於て之れが唯一の事であつたが、それにも拘らず頼恕に對しては士民が信服してゐたことを左記に依つて窺ふことが出来る。

「天保五年甲午八月六日、大風雨有之候處、御家中年久しく格段の御借り上げ米にて難澁に及、平日居宅之取繕ひ行届不申、破損多く有之候故、思召を以御手元金より一同へ御手當被下候、又右風雨時節惡く、稻作大に相痛み、百姓ども難澁之處、右にて御收納米大に相減、御救方御手當無之候に付、御手元金壹萬千九拾兩、利無年賦納にて御貸被下候、公御一世之間、御家中御物成貳ツ成又は壹ツ七步被下、暮に至御救米被下候も稀なる事にて、思召より出被下物御貸方等有之候は、僅に此一事のみにて候、年久しき御不勝手に、誠に已を得られざる故之御事には有之候得共、御撫育御行届有しとは申すべからず、然るに御在世之程、士民信服し奉りしは申に及ばず、今に至一同欽慕し奉るの深きは、全く平常御仁恤之篤きによれるにて、不思議之御事と申合候」。(56)

更に同年十一月十九日には、先に藩士の祿百石に付三石を減じて十七石としたものを復活して、祿百石に付二十石渡しとすることになつたことも亦其の一例である。(57)

然し藩の財政状態が確立して銀札の價值が回復し大いに流通したのは、前文の如く「砂糖爲替」の實施後である。此の「砂糖爲替」なるものは藩が天保六年十二月より藩債辨済のために「濟し方」なる役所を設けて以來、實施するに至つた處の製糖並に其の販賣に必要な資金貸付事業であつて、之れに就いては既に兒玉洋一氏が「高松藩に於ける砂糖爲替の研究」なる論文<sup>(58)</sup>に於て、其の實施方法・爲替の種類・管轄役所及び吏員等に亘つて述べられたので詳細はそれに譲り、此處には砂糖爲替を實施するに至つた事情及び其の實施に依つて藩財政が確立するに至つた理由をば主として銀札の發行との關聯に於て述べることにする。

先に述べたる如く、天保三年冬に江戸上方其他よりの借金元利の支拂停止を行ひ其翌年三月に平價切下を斷行したのであるが、右支拂停止は天保五年を以て満期となるため六年暮よりは相當の元利支拂をして行かねばならぬ。此の事情に迫られて藩當局者は其の支拂を如何にして行ふかに就いて頭を悩ました結果、着目したものが砂糖爲替であつた。<sup>(59)</sup>讃岐産の白砂糖は寛政二年向山周慶が製造し始めてより其の製法が傳授せられて、近村の富農が甘蔗の栽培及び製糖を試み、彼等が寛政六年に黒砂糖を同十年に白砂糖を大阪に積登すに至つて、<sup>(60)</sup>次第に聲價を傳し其の製法は進歩して、天保初年には「近頃は江戸大阪にても御國産砂糖を以、和製之第一等と致相好候故、利益多く、製造高年々に相増、殊之外盛大に相成居申候」<sup>(61)</sup>と言はれる状態になつてゐたが、只甘蔗の刈取より製糖並に其の積送販賣に至る迄の金融に關しては其の組織が不充分であつたので、此の點に藩當局者が着眼して糖業關係者の金融難を救ふと共に、糖業金融に依つて藩財政の改善を圖らんとするに至つたもので、此のことは正に一石二鳥の政策であつた。而して其の金融方法並びに藩財政救済方法の要點は左記に依つて知ることが出来る。

「……甘蔗刈取候より砂糖に製し、大阪積登し賣捌候迄費用大敷相懸り、右振替に百姓一同難義致候間、砂糖製造之土樽數に應じ、船中之爲替金として、荷主之百姓又は積受候船頭共へ銀札を御貸付被下、其砂糖を大阪へ積登し賣捌せ、右賣代之正金を以、爲替御貸付

之元利を大阪御屋敷へ取納、それを以御借り金銀御返済方相計ひ、餘金有之候は、御國へ積下し可申、左候時は一と方ならざる御融通に相成可申と之議有之、……」。(62)

然し乍ら此の砂糖爲替を實施するに就いては、當時の藩としては其の財源を矢張札會所の銀札に求める外なきことと、萬一砂糖爲替が不成績の場合に先年の如く銀札價值の暴落を來すことを虞れて躊躇してゐたために、砂糖爲替は評議のみで容易にその着手に至らなかつたのであつたが、<sup>(63)</sup>時の家老にして會計を總理せる箕速水が、札會所元占役の目下儀左衛門を「經濟に長じ非常の器量有之者に付」と藩主に推薦して、借金元利返済の件を儀左衛門に任かすれば必ず其の任に堪え得る旨を申述べ、之れが藩主頼恕の容るるところとなつて、遂に前述の如く天保六年十二月九日に「濟し方」なる借金返済方を取扱ふ新役所を設けることになつたのである。於之目下儀左衛門は「濟し方」を引受けて札會所との兼勤を仰付けられ、彼れに配するに吟味役として松原新平、北村佐七郎が任命せられた。<sup>(64)</sup>斯くて此の「濟し方」に於ては、從來「世帯方」に於て借金返済に振向ける豫定の米・金銀の品々を世帯方より受取つて、之れを引當として急に札會所より銀札を借入れて砂糖爲替の貸付を始めることとなつた。

砂糖爲替貸付金は毎年十月より十二月の間に融通せられ、大阪にて砂糖が賣捌かれると翌年四月迄には其の元利金が正金を以て大阪の砂糖會所に取納められることとなるので、「濟し方」に於ては此の納金を以て土方其他の從來よりの借金元利の支拂のみならず、世帯方の江戸藩邸への廻金をも賄ひ、尙残りたる金銀は高松へ送らしめて札會所へ納めることにし、一方札會所としては高松に於て、借金元利返済の代り銀札を「濟し方」より受取り、又江戸廻金の代り銀札を世帯方より受取ることとしたのである。<sup>(65)</sup>

右の如くに「濟し方」が藩の借金元利並びに江戸廻送金をも砂糖賣捌代金より支拂ひ、尙残りを札會所の引換準備金に充當し得たといふことは、砂糖賣捌に依る利益が莫大であつたことを物語ると共に、又一方札會所より借りたる銀札を返

濟し得たことは砂糖爲替貸付金の回收が確實であり且つそれに依つて得る利息収入が少からぬものであつたことを知り得るのである。事實、砂糖爲替貸付金は「今年は初年故少數に候得共、追々願入相増、兩三年之後は、毎年八九萬兩餘拾萬兩、其後は拾四五萬兩貳拾萬兩に至る」<sup>(66)</sup>とあるが如く逐年増加して行つたのである。而も「右爲替御貸付の銀札は、多分札會所之空札を借受、御貸付に致候事に候得共、先年之如く、通用銀札之多きに苦み候事は曾て無之候、此事初之程は如何危み候者多く有之候得共、儀左衛門最初より洞見致候義有之聊も相動き不申候」<sup>(67)</sup>とあるが如く、貸付金が増加して行つてもそれがために銀札の濫發とならず、且つ此の事を儀左衛門が洞見して居つたのは確かに彼れの卓見といふべきである。之れは要するに砂糖爲替貸付金として札會所より借受けて世上に出される銀札が一應増加するとも、砂糖の賣捌と共に貸付金が確實に回收せられることに依つて、札會所へ銀札の返納が出来たためであり、砂糖爲替の成功を示すものとして儀左衛門等の功績は大といふべきである。

右砂糖爲替貸付金は、今日で言へば爲替銀行の輸出金融の一方法たる輸出資金の前貸に當るものであり、輸出者が輸出品代金を入手すると共に銀行の前貸金は確實に回收せられ、一方其の輸出品代金は爲替銀行に於て外國より正貨で受取られるのと同様に、砂糖爲替の場合には大阪にて賣捌かれたる砂糖代金が正金銀にて受取られて其中より上方其他の借金の返済並に江戸廻金に振向けられたのであるから、今日で言へば、對外債務の返済並に在外公館費に充てられた様なものである。斯く見ることに依つて、砂糖爲替の金融機構は進歩的なものであると共に之れに依つて藩財政の立直しを圖るといふ一石二鳥の妙案であつたことが知られる。斯くの如くにして積年の高松藩財政の癆ともいふべき上方其他の借金の元利返済が出来ることによつて藩の對外信用は非常に向上して行き、遂には

「……萬端御都合宜く御借り金銀返済方も追々品能く被成下、年々御違約も無之候に付、金主共之思入立直り、折々不時の御用向も速に相辨じ後には大阪表にて御應對之宜しき諸家の中一二と申に至申候」<sup>(68)</sup>

といふ状態になつた。斯かる状態を以前の如き一時的彌縫策を事としてゐた状態と比べると云泥の相違であつて、従前に於ては札會所の引換準備金たる正金銀を枯渇せしめ尙世上の正金銀を漁つて、世人に危惧の念を起さしめ其の引換を誘致させたものは、左記に依つても知られる如く藩自身であつたのである。

「……只今迄、江戸上方連金、其外正金銀之御入用多分に候處、定りて金銀を上納候者は無之候に付、御世帶方之銀札を、札會所之金に引換用辨致候間、札會所引換元之金銀常に乏しく、時々指支、不得已、御世帶方札會所兩方にて、世上に通用し候處之金銀を、密に買上げ引換元に備申候、右に付自然之勢にて、世上より札會所へ引換を願出候者多く困却之處……」(69)

然るに砂糖爲替貸付事業の進捗に伴ひ、世人より銀札と正金銀との引換の要求があつても何等苦痛を感じず、寧ろ之れが却つて世上流通の銀札縮少となつて銀札價値の向上を來すことになり、又貸付に依つて世上に出たる多量の銀札も、一面に於て甘蔗畑の貢米代や其他砂糖關係の諸納金となつて其の回收が順調であるため、持續的な通貨膨脹の懸念が無く膨脹は單に季節的のものに過ぎなかつたことが左記に依つて窺はれる。

「砂糖爲替貸付之御趣法相立候而より、御世帶方之御入用は申に不及、札會所引換元御手當にも、世上之金銀には目を懸不申故、おのづから引換少く、たまたま引換多く候而も、聊指支無之、世上にてはそれ程之通用銀札減じ其位彌貴く相成申候、又毎年大數之銀札御貸出しに相成候得とも、砂糖作盛大に相成候に隨ひ、甘蔗作り付候田畑之貢米代、或砂糖一巻之諸納金銀大數之處、悉く銀札にて取納、其餘は金銀必用之引換に出候而、爲替貸之銀札世上に残り止り不申候間、何之指支も無之」(70)

右の如く砂糖爲替貸付事業の成功に因つて、多年に亘る藩財政の窮迫並にそれに伴ふ銀札の濫發は終りを告げて銀札の價値は回復し、砂糖爲替貸付事業は「此後様々之年柄も有之候得共、何之故障も無之趣法能く相行はれ申候」(71)とある如く順調に經過し、之れを擔當せる「濟し方」は後には其の開設の目標たる借金元利返濟より更に進んで、藩内へ融通の爲町村の身元有る者に對し低利の貸付をも行ふに至つたのである。而して「濟し方」を主宰する日下儀左衛門は濟し方開設の翌年(天保七年)勘定奉行に任ぜられ濟し方兼動となつて、以後「濟し方」は永く勘定奉行の兼務する處の役所となつ



て、「世帯方」及び札會所とは「水魚の如くにて御都合宜く」と記されてゐる。<sup>72</sup>即ち「濟し方」は世帯方及び札會所と密接なる連繫を保つことに依つて、元來藩公の賄ひ方として其の負債償却の任に當るべき世帯方に對して其の返済資金を補給すると共に、一方札會所の銀札發行の引換準備金をも供給することに依り、全く藩の財政・金融の中心機關となつたものである。斯くして頼恕の末年には次の如き状態となつて、濟し方の地位は確固たるものとなり、藩財政に大なる餘裕を生ずることとなつた。

「札會所引換元金用意として、御濟し方にて御貯金相備候に至申候、御世帯方も永々之困苦を相極候事故、公にも聊御弛なく御儉約被成、御家老初、御役人ども一致に御省畧取行候上、只今迄難義之第一たる御借り金銀御返辨方、並札會所引替元之差配を、御濟し方にて引受申候間、此後は何角之融通能く、今年より少々宛の御遣び残り金有之候而、公御末年には御軍用並凶年御手當之御貯金も相應相備申候」<sup>73</sup>

右の如くにして、頼恕が先代より受繼ぎ而も一層深刻となつた多年に亘る藩財政の窮迫は、漸く砂糖爲替事業の成功に依つて切抜け得られ、藩財政は餘裕のある状態を呈するに至つたのである。然し之れを以て藩財政を脅す禍根が凡て艾除せられたものと言ふことは出来なかつた。於之、取上げられたものは、天保十一年（紀元二千五百年）十一月七日に頼恕が命じた世帯行ひ方の改革であつて、頼恕は本村耳に會計を委任して改革を行はしめることとなつた。此の改革の主意は左の五項<sup>74</sup>に分たれてゐるが、要するに諸事儉約省畧といふことに盡きる。

- 一、儉約省畧之基本は、人に在て法にあらず、勤に在て人にあらずにて候事
- 一、省畧の本は、事を減じ候事可爲肝要事
- 一、儉約省畧之行ひ、法を守ると不守候と之境に有之候事
- 一、定府之家中、國勝手申付候事

## 一、諸役人高松より交代申付候事

而して此の改革を促すに至つた直接の原因は、江戸藩邸の費用が意外に嵩み國元より江戸への臨時の廻金が急増したことであつて、之れがために折角招來されたる余裕ある財政状態が再び崩れんとする氣配を豫め察して、藩財政をして健全確固のものたらしめんとする周到なる用意に基くものであつたことが左記に依つて知られる。

「右御改革被仰付候子細は、……彼是年分之御出方大に相減じ、其上専作打續、且は年來御儉約も行届候、……年に寄候而は、少分之御遣ひ殘金も有之選びに付、是迄之如く、御儉約雖なく取行ひ候得ば、程なく御勝手御取直し、士民御撫育も思召儘に被仰付、御安心之時節に相成可申と思召候處、今年に至、指たる不意之御出方も無之候に、御配り方大に御不足相立、甚御指支之趣に付御驚被成、其子細篤と御尋に相成候處、御國元之義は、總じて右思召之通にて、御役人共も御間様に相心得居候處江戸表は場所柄故、兼々嚴く御儉約被仰付候得共、何分無餘義事件指湊、御取締方行届衆候中、文姫君様御入興以後、右に關係候事どもは、猶更御省畧仕衆候義多く、……丁酉年文姫君様御逝去以後も、とかくに右之風習相殘り、定府之御役人共は、元より御國之御收納方、御世帯御配り方之様子を相心得不申候故、何かと品を付候て、御國より御定法外之廻金相増候様に仕向け候氣味有之、御國御役人共も其意を察し、様々指支を申候而申越候通には相廻し不申……御定法外之廻金は段々遲延に相成、不得已江戸にて當座御凌の御他借も致、夫等追送り今年に至、一時に廻金仕候はでは不叶次第に相成、如此御指支に立至候」(75)

右の如く國元に於ては年來儉約を行ひ來つたのに反して、江戸に於ては夫れが行はれず定府即ち江戸藩邸詰の役人等は國元の世帯の状態を心得ずして規定以上の廻金を要求し來ることが多く、之れに對し國元は要求通りの廻金をせず遅らせて來たが、遂には江戸に於てやり繰りが出來なくなつて一時に廻金をしてやらねばならぬ必要に迫られ、意外の指支へを生ずるに至つたのである。そこで

「御國表之義は、砂糖爲替貸御趣法相立候以來、金銀融通も宜く候間、是程之義忽之御凌方は御指支も無之候得共、是とて、畢竟御他借同様の義捨置候而は相濟不申、此上は江戸表御儉約之法、恥と相立不申候而は、御世帯御取直し之期有之間敷旨、御勝手懸り御役人共一同より申上、尤之義に思召様々御勘考之上、右之如く被仰付候」(76)

といふ次第で世帯行ひ方の改革が行はれることになつたものである。而して前掲改革主意の中最後の「諸役人高松より交代申付候事」といふ點に就いては、

「……定府之役人は、國元收納を始、江戸廻金配り方難澁の譯を不存、只國元よりは廻し方を呑み候様に相心得、國役人は大部之風儀を不存、只江戸にては物入を増候儀、心得違候意味有之候、高松より役人交替致候得ば、双方趣意相通じ、物每相談整能可有之事、<sup>(77)</sup>

といふ考へよりして、從來よりの江戸藩邸詰の奉行や勘定奉行に轉役を仰付け、國元より奉行、勘定奉行以下勝手懸りの役人共に交代をさせて取締方を嚴重にせしめた。<sup>(78)</sup>

右の如き天保十一年の世帯行ひ方の改革に依つて「此後は御國江戸御役人一致に相成御儉約行届候故、間もなく其效相顯れ、公御末年には大方御安心之場合に立至……」<sup>(79)</sup>とある如く改革主意の達成を見ることがとなり、更に第十代頼胤（靖公）天保十三年襲封の代になつても右改革の主意が堅く守られたため、遂には藩主よりの借上米を戻す（註五）といふ様に藩財政に余裕を生じて來た。而して其後間もなく外船渡來等の多事なる時節となつて來たが、以前の如く藩財政の窮迫を見ること無くして經過したのであつた。<sup>(80)</sup>

斯くて天保十一年の世帯行ひ方の改革は砂糖爲替事業成功の後を享けて、藩財政が再び窮迫に陥らざる様其の瓦解を防いだものと見る。ことが出來、砂糖爲替事業の成功を以て藩財政好轉の積極的原因とすれば、天保十一年に始まる諸事儉約省畧の勵行は其の消極的原因と言ふことが出來るであらう。特に砂糖爲替事業の成功に就いて

「……如此の勢力あるを以て、紙幣は次第に舊位に復し、後には人民正金を厭びて紙幣を好むほどになり、前の財政困難は變じて上下殷富の一大樂地と爲り、金庫の牀板も爲に墜つるに至りしとぞ」<sup>(81)</sup>

と記されてゐることも、形容が少しく誇張であるが偽りでは無い。更に、高松藩の産糖が悉く落外に輸出せられたものと見做して其の總價格を推算すれば、天保七年以降明治四年に至る三十六年間の總賣捌額従つて正貨吸收額は一千八百八

十三萬圓餘に上ると言はれ<sup>(82)</sup>。又明治四年「廢藩の時大藏省へ引續ぎし金のみにても「百餘萬圓を下らざりしと云ふ」<sup>(83)</sup>と誌されてゐる。斯くの如く維新前後に於て高松藩の財政状態が良好であつたことが、廢藩後今日迄も松平伯爵家が富有なる華族として其の地位を保持する基礎となつたものであると言ふことが出来るであらう。

(73)	(70)	(69)	(66)	(65)	(64)	(63)	(62)	(60)	(69)	(58)	(57)	(56)	(55)
同	(71) 同	(72) 同	(67) 同	(68) 同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
書	書	書	書	書	書	書	書	書	書	書	書	書	書
三八四—三八五頁。	三八四頁。	三八三—三八四頁。	三八三頁。	三八三頁参照。	三八一頁及三八二頁参照。	三八二頁参照。	三八二頁。	三八—三八二頁参照。 〔「經濟史研究」第十八卷第三號、三五頁。〕	三七八頁。	三七九頁参照。	三七九頁参照。	三七八頁。	三七四頁。

(83)	(82)	(81)	(80)	(79)	(78)	(77)	(76)	(75)	74)
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
書	書	書	書	書	書	書	書	書	書
三九四—三九六頁。	三九六—三九七頁。	三九七頁。	三九六頁。	三九七頁参照。	三九七—三九八頁。	三九八頁参照。	三九八頁参照。	三九八頁参照。	三九八頁参照。

(註五) 弘化元年に從來藩士の祿十分の五を収めたるものを免じて四分の一を収めることとなり、其後嘉永元年に再び十分の五を収めることとなつたが、嘉永三年に再び四分の一を収めることになつた。(増補高松藩記、五九八—五九九頁、高松藩記年表参照)。

増補高松藩記、三九八頁参照。

附録九一頁「松平頼恕公事畧」の中。  
井上甚太郎著、讃岐糖業の沿革(高橋龜吉「徳川封建經濟の研究」四三五頁より)。  
増補、高松藩記付録九一頁、松平頼恕公事畧」の中。

## 總

## 括

以上項を分つて高松藩に於ける文化・文政—天保年間に及ぶ約三十年間の財政難とそれが解消して財政状態の好轉良化するに至つた原因・経過を述べたのであるが、今本稿を終るに當り、右財政難及び其の解消・好轉の原因を要約して之等を社會經濟史的觀點より考察する。

徳川時代の諸藩の財政難が概ね左様であつたが如くに高松藩の財政難も結局は、全國的な貨幣經濟の浸透に伴つて領域的・自給自足的なる土地經濟が在來の状態を保持し得なくなつて來たことに根本的原因を見出すことが出来る。詳言すれば、徳川時代の諸藩の經濟は元來諸侯と領民との封建的關係を下部構造とし、土地を主要生産手段とし農業を主要生産業とせる土地經濟であつたが、<sup>(84)</sup>他方に於て商業の發達・市場の形成・資本の蓄積・商人の擡頭の如き諸現象の發生に依つて貨幣經濟が、土地經濟に密接に結付き乍らも發達して來たのである。<sup>(85)</sup>然るに元々土地經濟と貨幣經濟とは其の存立の原理を異にしてゐる所よりして、土地經濟は其の封建的生產關係をば貨幣經濟のために商業資本の擴大發展に基いて蠲食せられ、兩者の間に矛盾相對關係を生ずることとなつたのであり<sup>(86)</sup>貨幣經濟の全國的浸透に伴ひ諸藩の領域的・自給自足的なる土地經濟は次第に在來の状態を保持し難くなつて崩壊して來たのである。其の證據としての一例は、諸藩が貢米其他の國產物を大阪江戸其他に賣ることを必要とした點に示されて居り、斯くして諸藩の領域經濟は全國的流通經濟への聯關を求めなければならなくなつたのである。<sup>(87)</sup>

右の如き聯關を求める必要を生ずるに至つた直接の原因は、藩に依つて種々あつて必しも同一ではないが、諸藩に共通的なものとしては參覲交代制度及びそれに伴ふ藩主一族及び家臣等の生活の向上を擧げることが出来る。即ち參勤交代のために諸侯は國元と江戸とに藩邸を構へて二重生活を営むことを余儀なくせられ、而も江戸藩邸の生活費並に參勤道中

の費用は、自ら鑄造發行權を持たない正金銀を以つて支拂はねばならなかつた。<sup>(88)</sup>其上に生活の向上乃至は奢侈的費用の増加が加はり諸藩は可及的に正貨の獲得増加を圖る必要に次第に迫られて來たのであり、米其他の國產物賣却・又其の賣却の爲の大阪・江戸に於ける藏屋敷の設置は右の必要を充たす手段であつた。

然し乍ら斯かる手段に依つても救はれ得ない程に財政難が昂進するに及んで、其の切抜策として儉約の獎勵・新田の開發・國產獎勵・借金・御用金・田租等の先納・藩札の發行等種々の手段政策が講ぜられたが、就中藩札の發行の動機は甚だ好ましからぬことと考へ乍らも財政難救済のために止むを得ず行ふに至つたものであつた。即ち之れに依つて無利子の資金を造出し、領域内に於ける正貨の使用流通を減少せしめて領外に於ける正貨支拂により多くを充當せんとする意圖の存在したことが看取せられるのである。高松藩に於ける藩札發行の動機・目的も右の例外を爲すもので無いことは既述せる所に依つて明かであらう。要するに藩札の發行は、參勤交代に基く二重生活及び消費の向上の重壓が次第に著しくなつて來たため之れを切抜ける手段に窮して行ふに至つたものであり、其の結果は自給的領域的土地經濟の貨幣經濟への結付きに一步を進めたものであるといふことが出来る。

高松藩札は其の發行の初期に於ては他藩の濫發の例に鑑みて發行が慎重に行はれたため、其の流通狀態は良好であつて、之れに依つて財政難は余程切抜け得られたのである。然るに八代頼儀の時代に所謂「享和の新法」と稱して採られた積極的な銀札貸付政策並びに産業振興政策が失敗に歸するに及んで、之れが藩第三回目の財政難を招來する遠因を形成することになつた。特に産業振興政策は國產品の生産獎勵・其の買上及び積送販賣に依つて正金銀の領外流出を減少せしめ領内流入を増加せしめんとする意圖の下に行はれたものであり、積極的に貨幣經濟の潮流に乗出したものであるが、其の方法が放漫に過ぎて空札の濫發となり奏效するに至らなかつたのである。而して其上に天災地變等のために收納米の減少や臨時の出費等が加はる毎に藩札の濫發となり、又斯かる窮追を逃れるために儉約の獎勵・借金・國產品の買上積送・増

税の如き諸手段が採られたが、之等は何れも一時的の彌縫策に過ぎずして、結果は空札の濫發を加重するのみとなつて悪性インフレを深刻ならしめ、最後には手段に窮して御借上と稱し家臣の減俸を屢々行ふ様になつた。

右の如き経過を見ると、高松藩の財政難特に八代頼儀の時代の夫れは、結局藩主の參勤交代や幕府への臨時の手傳の如き公務遂行及び生計維持が困難となつたことに端を發し、之れに對して種々の彌縫策を講じ其の極、家臣に對する祿米の減少を行はねばならぬことになつたことが知られる。此の減俸は家臣の撫育を行ひ得ないことを示すもので、歴代藩主の苦慮した所であり、特に九代頼恕が其の就封の當時は、此の減俸を幾分にて緩和せんとして其の實現が出来ず、却つて高祿者の減俸を加重せねばならなかつた程財政難は深刻であつた。

凡そ徳川時代に於て各藩が、全國的政治・經濟の統制者たる幕府の統御に服すると共に、一面それ／＼獨立の領域經濟を構成して、藩主が其の主體となつてゐる以上、其の領域に於て採られる經濟政策が藩主中心主義となることは當然の勢であるが、と言つて、藩主は自らの利害のみを目標として其の恣意の儘に經濟政策を行ふことは出来ずして、其處には仁政を行ひ士民をして其の所を得しむるといふ政策理想乃至目標が存在してゐたのである。而して斯かる理想乃至目標を實現し或はそれに近づくがためには、先づ藩主の財政状態が良好でなければならなかつた。<sup>(89)</sup>然らざる限り封建的統御力を鞏固ならしめることは出来なかつたのである。<sup>(90)</sup>それにも拘らず前述の如く財政難のために遂には家臣の俸祿までも減額し其の撫育が思ふ様に出来ないことは、如何にも右の理想乃至目標とは懸離れたことであり、之れを藩主が苦痛とすることは當然であつた。

斯くて頼恕の時代は其の當初より深刻なる財政難に直面しつゝも、尙其上に先代の時に婚約せる將軍家の女文姫を迎へるために仕度金等の調達に苦心せねばならぬこととなり、又文姫夫人及び其の近親筋への賄料の多額のために結局負債の増嵩となつて行くより外なき有様であつた。そののみならず、此の將軍家との結縁は頼恕の時代を通じて生計費を膨脹せ

しめる有力なる原因となつたことは争ひ難い所であつて、特に屢々の儉約勵行の申渡にも拘らず江戸藩邸の生活費の節減が出来ずして、文姫の逝去後も濫費の風習の残つてゐたことが天保十一年の世帯行ひ方改革の際に問題となつたことは既述の如くである。

凡そ頼恕の一代は、如何にして深刻なる財政難に基く莫大なる負債を軽減し、財政状態の好轉を圖るかの對策に腐心したものと云ふことが出来るが、其の對策は最初は非常儉約の申渡や收納米の賣拂・國產品の買上積送販賣の如き在來行はれたる彌縫策に過ぎずして、之に依つて對外負債たる諸國に於ける借金を幾分軽減し得たにしても、一方には對内負債たる銀札の盤發を甚しくする結果となり、遂には札會所を閉門して正金銀との引換を行ひ得ないこととなつた。於之、銀札の價值は下落を重ね、最後には法定比價の十七分の一迄にも慘落して悪性インフレ状態を招來したのであつた。其後此の銀札價值の暴落の跡仕末をなさんとして平價切下の豫告をしたが、それを實現せしめるためには、銀札の回收を圖らねばならぬことに氣附き乍らも、屢々評議を重ねて其術無きに苦んだ揚句、富有なる農商業者より彼等の收むべき定貢を賣渡すといふ不體裁なる方法其他二三の方法に依つて銀札の回收に努めたのであるが、其の回收高は流通高に比べて少部分に過ぎずして、積年の財政難は容易に打開せられず、遂には先代の行つた家臣の減俸を更に加重せねばならぬことになつて、仁政を行ふといふ政策理想とは懸放れた状態となつた。斯くて頼恕の時代もそれ迄は、結局先代と同じ様に、生計費の膨脹に始まり、それに依つて加重せられた財政難を打開する對策は、種々の彌縫策の段階を経て遂に祿米給與の減額といふに歸向したのであつた。

然し乍ら深刻なる財政難が藩士の祿米の減少位に依つて打開せられるものでは無く、此處に何等かの新方策を講ずる必要に迫られて、遂に江戸上方其他の借金元利三年間支拂停止を思切つて斷行することとなり、之れに依つて借金返済手當の收納米を浮上らせ之れを賣却して銀札の回收を圖り、更に定貢以外の特別課徴を三ヶ年間行ふことに依つて漸く世上の



銀札流通高を相當減少せしめることが出来、銀札價值が回復する勢となつて來た。そこで平價切下を實現する準備として世上流通の銀札を悉皆提出せしめて其の流通高を確知したる後、之等舊札に對し爾後以前の十分の一の價值しか認めないことにし、更に相當の引換準備を置いて舊札を新札に引換へるといふ手續を経て、漸く平價切下が其の豫告より五年目の天保四年に至つて實現することになり、其後銀札價值は兎に角下落することなく維持せられたのである。

右の如き借金元利支拂停止以後の處置は、貨幣經濟の重病たる惡性インフレに憐む財政難對策としては妥當性を有するものと考へられるのである。即ち、惡性インフレの結果兌換を停止せられて氾濫せる銀札に對して平價切下を行つて兌換を復活するためには、貨幣經濟的メスを揮つてデフレーションを惹起せしめることに依つて、其の回收整理を行ふことが先づ必要であり、斯くすることに依つて健全財政を招來せしめる地盤が作り上げられるからである。それ故に元來貨幣經濟の浸透に基いて招來せられたる高松藩財政難打開の端緒は平價切下の實現といふ全く貨幣經濟的政策に依つて切開かれ、財政狀態の好轉を見ることになつたのであるといふことが出来る。於之、賴恕は平價切下實現の翌年の大風洪水に際して家臣に對し手當を支給し、又百姓達に無利子年賦償還貸附を行ひ、更に同年末には減俸を復舊するなど、其の一代に於て未だ會つて無き仁政を施すことが出来たのであつた。

其後、借金元利支拂停止の満期に對處して、藩債返済のために「濟し方」なる新役所を設け、之れが砂糖爲替貸付事業を實施することに依つて、糖業關係者の金融難を救ふと共に、藩財政の改善を圖るといふ一石二鳥の政策が、藩札の發行に財源を求めて行はれたのであるが、幸に當局者として貨幣經濟に通曉せる白下儀左衛門等の人を得て、進歩的な金融機構の下に藩札の濫發を惹起すこと無くして此の事業が成功し、正金銀の獲得増加に依つて藩債の償還のみならず、江戸藩邸への廻金をも賄ひ、尙札會所の準備金の充實をも圖り得たのである。之れがために「濟し方」は藩の財政・金融の中心機關として確固たる地位を築き上げ、高松藩の財政狀態は全く面目を一新し、銀札の價值は向上して對外信用は高ま

り余裕ある財政状態が齎されることになった。

右の如く砂糖爲替事業が成功したのは、前述の如く當局者に人を得たことや、砂糖賣捌の利益が莫大であつたことや、貸附金の利息収入が多かつたこと等に負ふものであるが、就中金融機構が進歩的であつたために藩札を財源とし乍らも其の濫發を見ること無くして其の價値の回復向上を來たさしめたのである。詳言すれば砂糖爲替貸附金が甘蔗栽培資金・肥料買入資金・製糖資金・積出資金を始め價格騰貴迄賣却延期資金、更に廻船難破等の際の救済資金等の種類に分れ、今日の生産金融・輸出金融及び海上保険金融までも包含するものであつて、而も之等の金融を組織的な統制方法に依つて行つたがために、結果に於ては專賣と同一の効果・利益を擧げることが出来、各種資金の回收が順調に行はれたために、季節的なる藩札の増發はあつても持續的なる膨脹や濫發を見なかつたのであると考へられるのである。

以上の如き考察に依つて、砂糖爲替事業は、甘蔗なる土地生産物の栽培に始まり其の製糖化せられたるものを藩札を通じて貨幣化せしめて、土地經濟の貨幣經濟への結付を圓滑に實現せしめることに依つて、前者の後者への適合を圖り、次で製糖を輸出專賣することに依つて正貨の獲得増加を實現して、領域經濟の全國流通經濟への參加適應を容易ならしめたがために、藩主の生活維持の困難・生活の向上に端を發して深刻となれる積年の財政難を解消・好轉せしめることが出来たのである。約言すれば領域的・自給自足的な土地經濟と全國的貨幣流通經濟との相剋矛盾を克服して前者の後者への順應が行はれたからであると結論することが出来るであらう。而して頼恕の時代の最後に行はれたる天保十一年の世帯行ひの改革は、右の砂糖爲替事業成功に基く財政好轉を再び瓦解せしめて財政難の再來とならぬ様周到なる用意の下に、其の締括りをしたものに外ならないのである。(完)

(84) 堀江保藏、「近世日本の經濟政策」  
四二—四四頁參照。

(85) 同書

五九頁參照。

高松藩文化—文政—天保年間の財政難と其の解消

(88)(87)(86)

同 同 同  
書 書 書

六七頁参照。  
六四—六五頁参照。  
六五頁参照。

(90)(89)

同 同  
書 書

九三—九四頁参照。  
一六五頁参照。  
〔註六〕之等の種類に就いては、前掲の兒玉洋「高松藩に於ける砂糖爲替の研究」参照。

(三五)三五